

非転向を貫いた朝鮮語学者たち  
—朝鮮語学会事件を考える—

日時 2018年6月22日(金) 13:00~14:30

場所 千里山キャンパス 尚文館 1階 マルチメディアAV大教室

講師 熊谷 明泰 (外国語学部特別契約教授)

貴族院での天皇機関説排撃(1935年)を機に、「国体」思想に基づく天皇制ファシズムの嵐は朝鮮統治にも波及した。朝鮮総督府は、日中戦争がはじまると「内鮮一体化」「皇国臣民化」のスローガンを掲げて天皇制イデオロギーを朝鮮民衆により強く押し付け、朝鮮民族の文化的アイデンティティを踏みにじった。そして、太平洋戦争が始まると朝鮮での徴兵制実施を決定し、朝鮮青年たちに「一死報国」を求めた。当時、これと軌を一にして学校教育では朝鮮語教育が全廃され、「国語全解・国語常用」政策が「総力戦」体制のもとで強く押し進められていた。

1942年10月から1943年3月にかけて朝鮮語学会会員29名が次々と検挙・拘束され、治安維持法違反の嫌疑で16名が起訴された結果、12名に有罪判決が下される「朝鮮語学会事件」が起こった。当時、朝鮮語学会は朝鮮語綴字法制定、標準語彙査定、外来語表記法の規範化を行ったうえで、朝鮮語大辞典を編纂しているところだった。このような朝鮮民族の文化的アイデンティティ維持を図る朝鮮語学会の語文運動を犯罪視した裁判では、「民族固有の語文の整理統一普及を図るひとつの文化的民族運動」が「民族独立運動の漸進形態」であると断罪し、1945年8月17日まで朝鮮語研究者たちに獄苦を強いた。また、李允宰(1888~1943.12.8)、韓澄(1886~1944.2.22)の2名は獄死している。取調べは日本人と朝鮮人の警察官10余名からなる専担取調班によって行われ、特に2名の朝鮮人警官がむごい拷問を行ったという。「日本帝国」の理不尽な朝鮮語抑圧政策のもと、「親日」(植民地統治への積極的協力)と「抗日」の谷間で引き裂かれた民族の悲哀だった。

尹海東という韓国の研究者は、「異質な他者を支配しながら同一性を支配の核心に掲げるということは、他者の異質性をそのまま認めないという決意を表すものである。これは、他者の他者性を否定することにほかならない。このように、同一性イデオロギーの暴力性は、どんな物質的な暴力よりも暴力的である。」(『植民地がつくった近代』、三元社、2017年)と書いている。日本の植民地統治が朝鮮民族に迫った文化的従属は、いまも癒しがたいトラウマとなって、歴史の記憶から拭い去られてはいない。本講座では、「朝鮮語学会事件」を考察しながら、東アジアにおける歴史認識を再考する機会にしたいと思う。

\* \* \*

●聴講無料 予約は不要です。多数のご来場を歓迎します。  
手話通訳が必要な場合は、6月7日(木)までに人権問題研究室へご連絡ください。

第95回 10月26日(金) 13:00 「社会学的ソーシャルワークと福祉教育—シカゴ学派の社会生態学の活用—」(仮)

第96回 11月30日(金) 13:00 「セクシュアル・ハラスメント30年—何がどう変わったのか—」(仮)

会場は、尚文館 1階 マルチメディアAV大教室



主催 関西大学人権問題研究室

〒564-8680 吹田市山手町3-3-35 阪急千里線「関大前」駅下車

Tel 06-6368-1182 Fax 06-6368-0081

ホームページ <http://www.kansai-u.ac.jp/hrs/>